

2022.12.04

南方熊楠が訪れた西ヶ原の遺跡

牛山 英昭（北区飛鳥山博物館）

1. 『南方熊楠日記』に記載される西ヶ原および周辺での土器採集等

1885（明治18）年

1月6日（火）

朝六時半より西ヶ原村山林学校に趣き、松下友吉、野尻貞一二氏と校内及び滝不動辺にあそぶ。滝不動辺の化石をとらんとするも、寒氷凝固して手を下すべからず。二氏と道灌山を経て上野に趣き博物館を觀、牛肉を食ふ。此日二氏所採集、古土器片及古介殻を獲たり（校内及滝不動辺）。

2月7日（土）

午後二時野尻貞一氏来り、山林学校内所出古碑一面を投与さる。明応年中のものなり。

2月15日（日）

朝七時半より山林学校に趣き、松下、野尻二氏に面す。王子製紙場を見、近傍丘陵を歩行す。・・・
＜中略＞・・・此日校内にて骨片一個、土器片十五箇、石器二個を採集せり。・・・

3月8日（日）

午前八時より山林学校に之き、松下、野尻二氏にあふ。午前〔午後か〕一時比野尻氏と偕に道灌山を経て上野に趣き、教育博物館を見、帰宅。此日山林学校校内にて土器三箇を得たり。・・・

4月24日（金）

・・・頃日佐野氏發議飛鳥山遠足の事を議す。

4月29日（木）

・・・

午後野尻、松下二氏来訪。野尻氏より山林学校前にて得たる骨二個、土器片四個、石器一個を贈らる。・・・

7月3日（金）

・・・正午より松下、野尻二氏と山林学校へ往き、二時間余り遊び、帰途介壠を見る（丘の南東にあり）。甚大なり。・・・

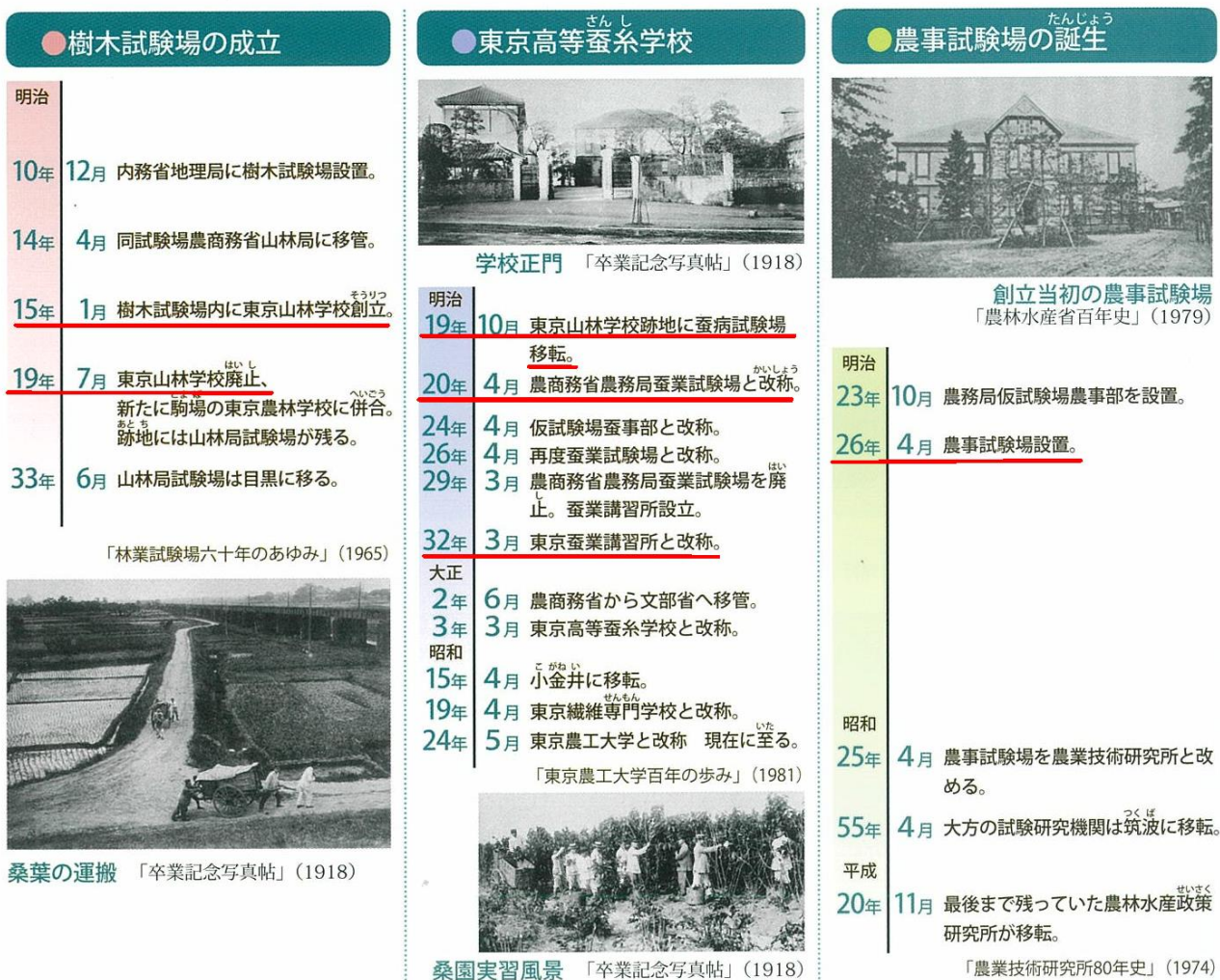
2. 山林学校の遺跡

『南方熊楠日記』にたびたび記載される「山林学校」（＝東京山林学校）、南方熊楠は、ここで縄文土器片を採集している。東京山林学校があった西ヶ原村には、「西ヶ原貝塚」という著名な貝塚がある。大森貝塚が発見された翌年の1878（明治11）年頃には、その存在が知られるようになった貝塚で、現在は東京都指定史跡となっている。明治時代から多くの研究者が訪れた西ヶ原貝塚ではあるが、南方熊楠が訪れた「山林学校の遺跡」は、西ヶ原貝塚とは別の遺跡である。

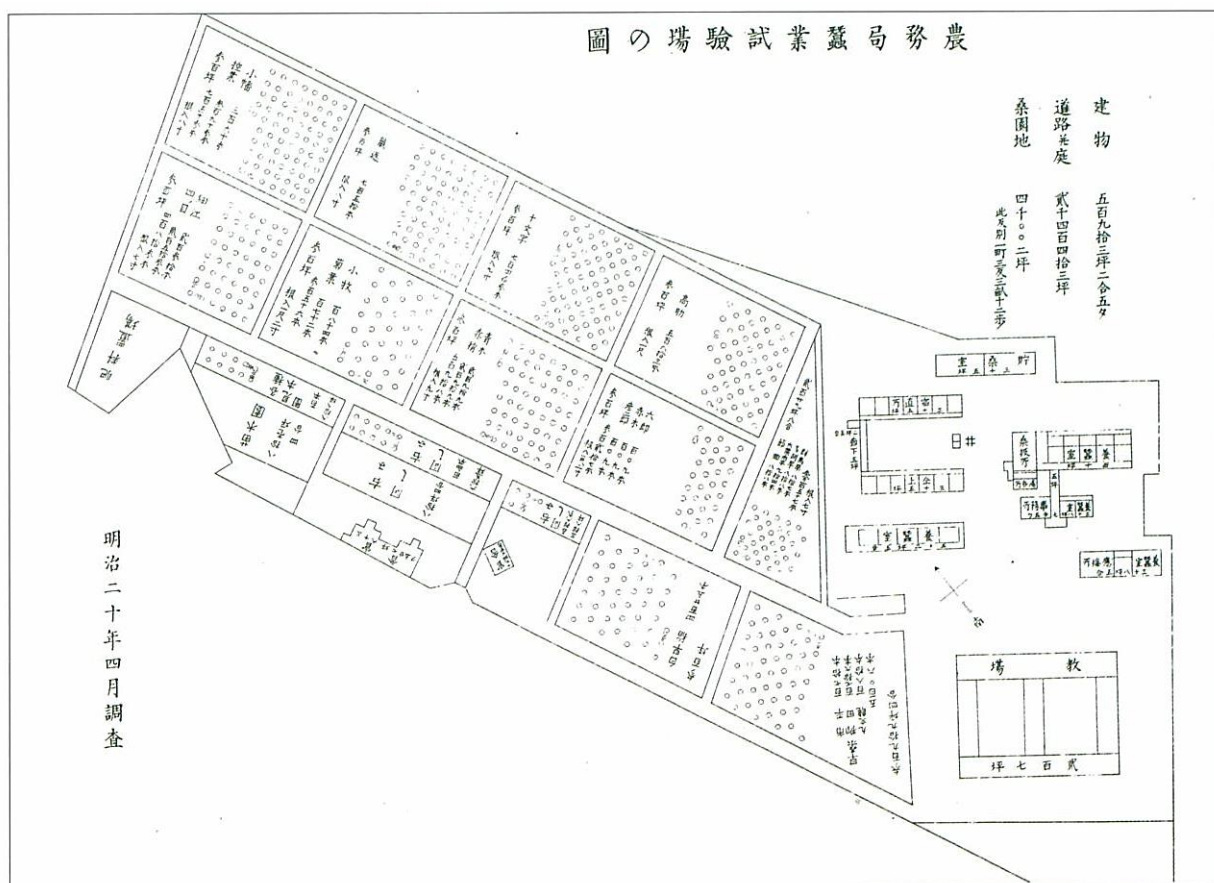
1) 東京山林学校

東京山林学校は、1882（明治15）年に農商務省山林局所管の樹木試験場内に設置された。1886（明治19）年、東京山林学校は駒場の東京農林学校に併合され、その跡地には農商務省蚕病試験場が移転、翌年には蚕業試験場、さらに後には東京蚕業講習所と改称された。1914（大正3）年には東京高等蚕糸学校と改称され、1940（昭和15）年に小金井へと移転し、現在の東京農工大学へと継承されている。東京山林学校があった場所には、現在は独立行政法人国立印刷局東京工場がある。

農業関係試験研究機関の系譜



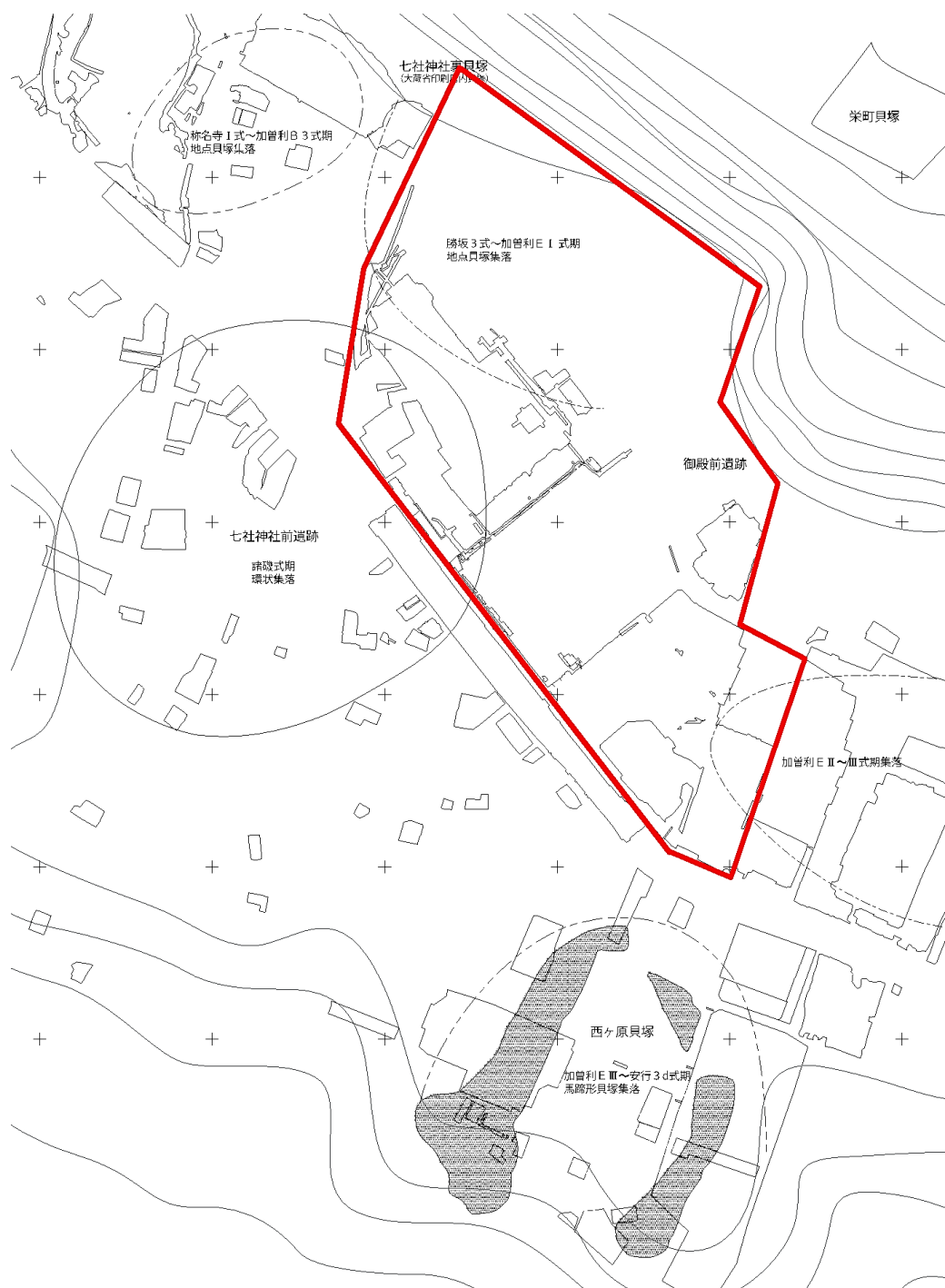
第1図 西ヶ原における農業関係試験研究機関の系譜（『北区飛鳥山博物館常設展示案内』より）



3) 西ヶ原遺跡群内の縄文時代の遺跡

西ヶ原遺跡群に該当する国立印刷局東京工場の敷地内では、建物の建築工事等が行われるたびに、事前に発掘調査を実施してきており、遺跡の内容が明らかにされつつある。縄文時代に限ってみれば、七社神社前遺跡の前期（諸磯式期）環状集落、七社神社裏遺跡（七社神社裏貝塚）の中期（勝坂3式～加曽利EⅠ式期）貝塚集落、御殿前遺跡の中期（加曽利EⅡ式～Ⅲ式期）集落が確認されている。

また国立印刷局東京工場周辺地でも頻繁に発掘調査が行われており、上記以外に七社神社裏遺跡の後期（称名寺Ⅰ式～加曽利B3式期）集落、西ヶ原貝塚の中期後半～晩期（加曽利EⅢ式～安行3d式期）の貝塚集落が確認されている。



第6図 西ヶ原遺跡群内の縄文時代の遺跡（太線囲み：東京蚕業講習所のあったおよその範囲）

4) 採集資料からみた「山林学校の遺跡」

南方熊楠自身が採集した土器については、以下の表にまとめられる。

採集年月日	採集地	土器型式
明治18年1月 6日	山林学校	安行1式（後期）
明治18年2月15日	山林学校	阿玉台式前半（中期） 堀之内1式（後期）
明治18年3月 8日	山林学校	阿玉台式（中期） 加曽利EⅠ式（中期）

表1 南方熊楠が採集した土器

南方熊楠自身が採集した土器は、いずれも山林学校内で採集したものであり、採集された土器には、阿玉台式、加曽利EⅠ式、堀之内式、安行1式のものが認められる。

まず、前期の土器が認められないため、前期環状集落である七社神社前遺跡の範囲での採集の可能性は極めて低いといえる。

阿玉台式は、七社神社裏遺跡で確認されている集落跡の時期に該当するものであり、同遺跡範囲内で採集された可能性が高いと判断できる。また近年になって同遺跡には堀之内1式期を含む後期集落が展開していることも明らかになってきており、堀之内1式土器が採集されていること、また遺構に伴うものではないが安行1式も少量ながら近年実施されている発掘調査で出土しているので、この点でも矛盾していない。さらに、2月15日の記述では「骨片一個」も採集されているが、七社神社裏遺跡で行われている発掘調査では、縄文人骨や獣骨の出土例もある。

一方で、御殿前遺跡の範囲内でも、上記の型式の土器が出土することもあるので、御殿前遺跡で採集されたものだとしても、必ずしも矛盾するものではないが、同遺跡の中心時期である加曽利EⅡ～Ⅲ式が認められないことからすると、その可能性は低いと言わざるを得ない。

以上のことから、南方熊楠が土器を採集した「山林学校の遺跡」は、現在の七社神社裏遺跡（七社神社裏貝塚）であると判断したい。

なお日記では、4月29日の記述で、「山林学校前にて得たる骨二個、土器片四個、石器一個を贈らる。」とある。「山林学校前」という位置は、御殿前遺跡、もしくは西ヶ原貝塚に該当する可能性も秘めるが、これは南方熊楠自身が採集したものではないため、南方熊楠が訪れた遺跡とは言えない。また採集資料そのものも不明であるため、どの遺跡に該当するか判断することは現時点では難しい。

3. 明治期の西ヶ原における考古学研究

西ヶ原およびその周辺地では、1878（明治 11）年頃の西ヶ原貝塚の発見以後、これまで多くの研究者が訪れ、考古学的な調査・研究が行われてきた。明治時代に行われた調査・研究には、主に以下のようなものがある。なお現在、西ヶ原貝塚は都史跡、西ヶ原の台地の崖線下にある中里貝塚は国史跡に指定されている。

表2 明治期の西ヶ原および中里における主な考古学的調査・研究

1878（M11）年頃	W. S. チャプリン、石川千代松による西ヶ原貝塚の発見。
1883（M16）年	白井光太郎が「中里村介塚（中里貝塚）」を訪れる。
1884（M17）年	白井光太郎が、坪井正五郎とともに「中里村介塚」を再訪。
1885（M18）年	南方熊楠が山林学校内で土器等を採集。
1886（M19）年	白井光太郎が「中里村介塚」を『人類学会報告』1-4 で発表。
1892（M25）年	坪井正五郎が西ヶ原貝塚を調査。翌年より「西ヶ原貝塚探求報告」として7回にわたり『東京人類学会雑誌』にて報告。 若林勝邦が「下総武蔵相模ニ於ケル貝塚ノ分布」『東京人類学会雑誌』7-73において、「北豊島郡西ヶ原村（山林局試験所ノ西北）」と記載。七社神社裏貝塚か。
1893（M26）年	西ヶ原農事試験場構内（御殿前遺跡）において3点の土器（弥生土器）発見。「弥生式土器」名称誕生の契機となる。後に、八木英三郎、大野雲外が『東京人類学会雑誌』掲載文において記述。
1894（M27）年	佐藤傳蔵・鳥居龍蔵「武蔵北豊島郡中里村貝塚取調報告」『東京人類学会雑誌』9-98、9-99
1896（M29）年	佐藤傳蔵・鳥居龍蔵「武蔵国北豊島郡中里村貝塚取調報告」『東京人類学会雑誌』11-121に、「中里貝塚ヲ飛鳥山丘続キヨリ望ミタル図を掲載。

南方熊楠が西ヶ原の地を訪れたのは1885（明治 18）年、まだ西ヶ原貝塚や中里貝塚の存在が注目され始めて間もない頃のことである。

現在の七社神社裏遺跡（七社神社裏貝塚）にあたる遺跡について記録されるものとしては、1892（明治 25）年に、若林勝邦が「北豊島郡西ヶ原村（山林局試験所ノ西北）」と記したもののみである。同年に西ヶ原貝塚の発掘調査を実施した坪井正五郎は、翌年の報告のなかで、西ヶ原貝塚に近い遺跡として「東北の方二丁計にして農商務省養蚕試験所裏の貝塚あり」と記しているが、まず「養蚕試験所」は「蚕業試験場」の誤りとみられるが、西ヶ原貝塚からみた方角を「東北」としているので、これは西ヶ原農事試験場構内の貝塚（現・御殿前遺跡）を指すものとみられる。

このようにしてみると、南方熊楠より以前に、現在の七社神社裏遺跡（七社神社裏貝塚）にあたる考えられる「山林学校の遺跡」に触れた事例はなく、南方熊楠は同遺跡に最初に着目した研究者ということになるであろう。